魚信

アタリ

1993. 12. 8.

岡　力

[いたち川、遊歩道に 花たんを作って 楽しむ]

[葉山沖にて イナダ釣りから 下船、息子の船長 30才]

魚信と書いてアタリと読む、国語辞典を見ても出ていない。この言葉は魚釣にだけに使う字ではないかと思う。魚釣の読物には出ていることもある。釣雑誌やスポーツ新聞にはアタリとしか出ていない。

魚が釣人に送る信号である。うき釣ではうきの沈みや小さな動きを目で見てアタリを知る
竿釣の場合も竿先の微妙な動きでアタリを感ずる。手釣では目に見えないところから釣り糸を伝って糸を持つ手に信号を送ってくる。
人の身体に感触を伝える意味から魚信(アタリ)と云う字が出来たと俺は思っている。

俺はこの字が好きだ、魚信を始めて体験したのは小学校一年生の夏だった。村の溜池でドンコッを釣った。初体験のことは幼い子供の脳裏に今もはっきり残っている。
その時は池の水がとてもきれいで底まで澄んでいて田にしや小さなえび魚が泳いでいるのが見えた。

魚の目の前に餌を落すとドンコッが餌をパックと口にした、その時小さな指先に生れて初めて魚信を感じた。

あの時から55年もの永い年月が過ぎ去ったが今でもはっきと覚えている。

コクヨ コピー10 (28×16)

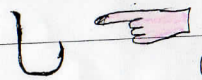
その頃は今日ような立派な釣道具は無かった。誰から教えてもらったか、他人の見て知ったか覚えていないが 釣道具は自分でこしらえた。

村（岡山県浅口郡里庄村）の魚屋さん（永原さん）が毎日自転車で魚を売にくる。 瀬内海でとれたチヌ、スズキ、渡りガニ、たこ、アジ、鰯、サバ、シバエビ、あなご、カレイ、サワラ、鯛等 季節の魚を木箱に重ねて持ってくる。 俺は色んな魚に興味を持っていたので魚屋が来ると背伸びして自転車の上の箱の中を見たもんだ。

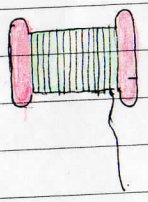
母はあなごが好きでよくあなごを料理してもらっていた。あなごは針を口の中に飲込んでいるので口から取り出してくれる。 そのよごれた針をきれいに洗って大事にとって置き使う。

釣糸は母の留守に裁縫箱から紙の糸巻きにきれいに巻いたものを使うだけ切って持ち出して使った。

物が不自由な時代（1938年）で母に見つかりひどくしかられたことを覚えている



あなごの口から外した釣針
（田舎ではチンゴと云っていた）

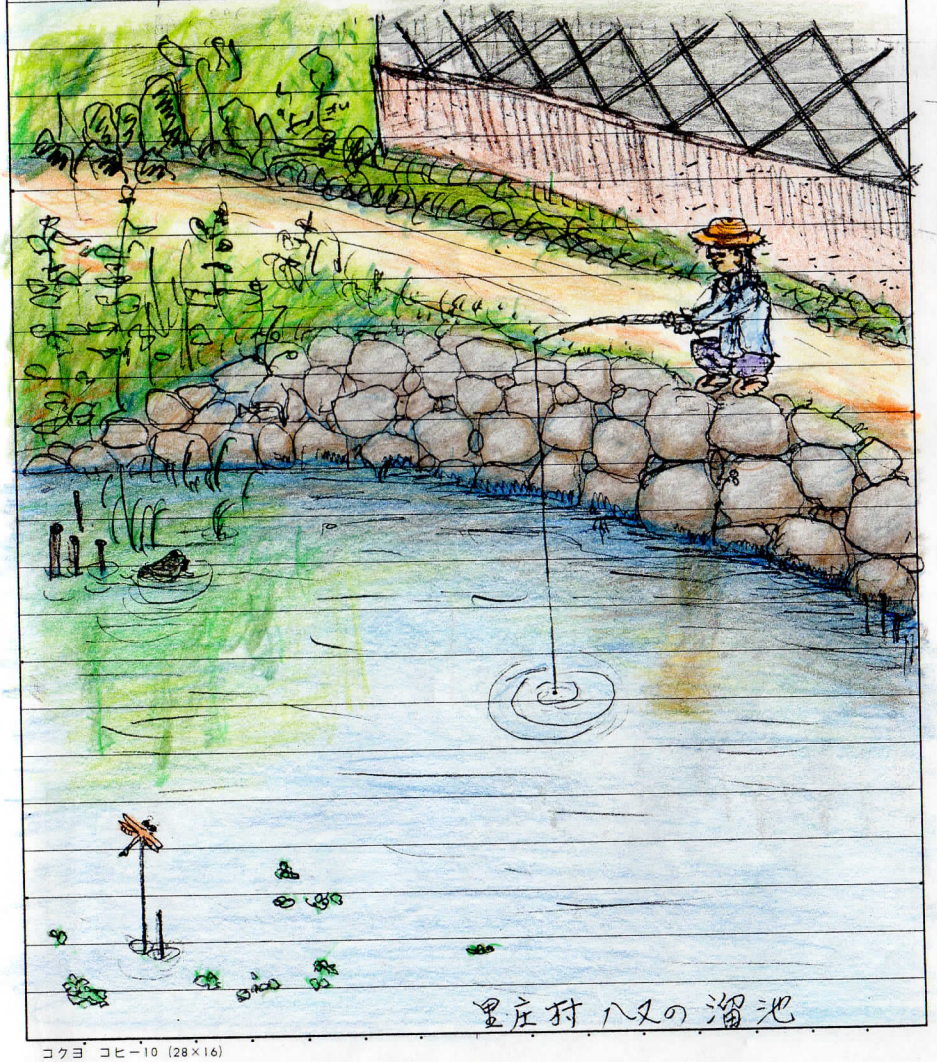


母が大事にしていた
木綿の糸

初めて釣れたドンコツは15cm位あっただろうか。無中で池の端の草の茂った道をまっしぐらに走って戻った。

胸がどきどきしていた。俺には大きく見えた。ドンコツを持った俺の顔を見て母もおどろい見せてくれた。あの時のやさしい笑顔を一生忘れることが出来ない。

母の年令は28才でかすりの着物を着ていた。



里庄村八又の溜池

昭和13年8月.

秋が深まり海上の冷たい潮風が身をさすようになる。防寒着の中はそうでもないが潮水に濡た手先がしみて感覚がなくなる。俺は他の人より手足の指先まで血液がよく廻らないのか最近は特によくしみるようになった。

こゝは城ヶ島沖で波のうねりが大きい。冬になると海水の温度も下がり魚は少しでも暖かい深いところに生息するようになる。反対に浅場にやって来て産卵する魚も居る。しかし大方の魚は深場に集ってくる。

今日も我家から片道10km位の舟宿鴨下丸にやって来た。『この舟宿には五人船長が居てそれぞれ違った魚を目的に船を出して居る。種類は季節によって多少違うが鯛。アジ。は年間通して出している。季節の魚として春は白ギス、メバル、夏はたこいさき、秋は石もち。イナダ。冬はすみいか、かれい、等の船を出す。』

俺にはアジが一番よく向いている。他の魚も時々やるが一日中楽しめてしかも余り外れがないからだ。

次男の船長はアジ専門で若い人から年寄までベテランからビギナーまで一番人気があると俺は思っている。

寒風の中を大きく揺れながらアジの釣場にやって来た。既でに15~6ぱいの釣船が集まっている。

釣場に着いてから船長は魚群探知の映像を見ながら舵を右に左にと廻している。海底の状況が刻刻と変るようすが映像に現れている。水深と海中の物体が音波にはね返ってくる。魚は小さな点になって映像に写し出される。

俺は何時船長が船を止めるか準備OKにして待つ。どうかよいポイントにやってと心で祈る。

今日の釣果はポイントの良し悪しでずい分変ることがあるからだ。10分 15分と船は釣場をあちこちと動き廻る。なかなか反応が無いのか船長は辛抱強く魚群を捜す。俺はもういゝかげんにして早く釣らしてくれとじっと待つ、やがて30分にもなろうとしている。それでも船長はまだ同じ場所をもう一度廻る。船長の納得するまでやる妥協を許さない船長に頭が下る思いがする。釣っている他の多くの船から離れ別の釣場に走り出した。

ポイントを捜し始めて40分位でやっと船を止めた。今日は何匹位釣れるか胸の中で目標を決める 機待で心がわくわくして来る。

お待たせしました…やって下さい!!の声で皆一せいに仕掛を海面に沈める。

自信にみちた船長の声を聞くと俺は励まされた気持になる。!!よしあれほど一生懸命に捜してくれたポイントだ 船長の機待に答えてやろうと気持が高ぶって来る。この心の高ぶりが好きだ。

釣宿には二通りの釣船がありこの東京港及び関東地方では乗合と仕立の船が

ある。 仕立船は前もって予約して 8人～20人位いグループで申し込み制で たいがい駐場の知合いとか、知人の集まりで釣そのものより仲間とのふれ合いと飲みくいを楽しむ方が多い。多少の無礼講も仲間同志で済む。

しかし乗合いの場合は面識のない初対面の人間と常連客で様々な釣愛好者が来てくる。

乗合い船は一人でも乗れる。しかし時間は船長が決める。座席は先着準で自分がよく釣れると思うところに早朝に行って取る。魚によっては釣座によって相当差が出る。スミイカ、鯛たこ、と云った群れで行動しない魚類は潮先と後で全く異ることがある。群れで行動する鰹、サバ、鰯、アジ、はまち、等はどこに釣座をとってもそれ程差が出ない。しかし水深が深く潮の流れが早い時は他の人と糸がからむので大とも(船尾)が良い。しかし大ともに座るには2～3時前に暗いうちにやってこないと取れない。

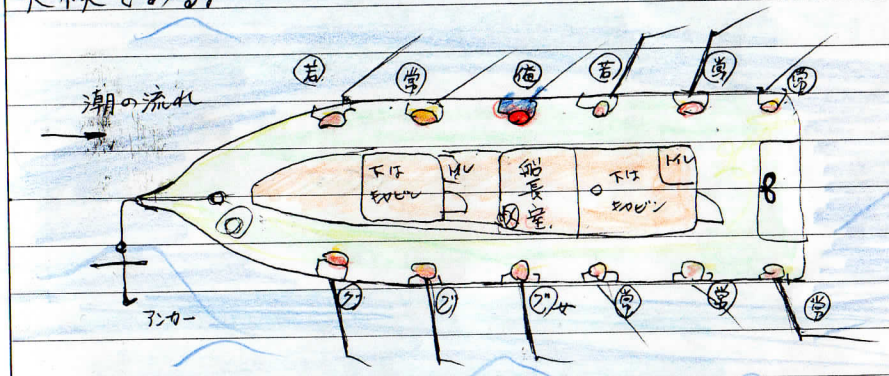
乗合客は色々の人がくる 若いのから老人まで職業はサラーリーマン、駐人さん、自由業、国家公務員無駐の人学生と全職種であるが本当に釣の好きな人ばかりだ。お互い相手を知らない者同志で共通した者はいない。気の知れない者ばかりであるが話しをすると相手にしてくれる人間と無口で他の人とは仲良く話す人間もいる。

しかし釣り始めるとみな目の色が変るもんだ。俺も釣っている時は余計な言葉は一口も話さない。釣に無中になるもんだ。

船長が水深 95m 底から 3mから5m でやって下さい。潮が動いていないのでこませ(寄餌)を振って 1m 上げてやって下さいとアナウスされる。

今日は水曜日で釣客が少ないと思って来たら片側 6人づつで 12人であり丁度こませがよくきいてよいと思う。

しかし風と波が荒くそのうねりが大きくて魚信をとるにはむつかしい、魚釣には適さない天候である。



常……常連のお客　若……20～40才　グループ

こませの鰯のミンチをステンレスの針金で編んだこませかごに一ぱい詰める。それから 2本の釣針に餌(赤く染めた 5mm角位いに切ったいか)を付け海面に投入する。

こませかごの錘の重量が 180号 (700g) と重いが潮の流れで道糸が斜めになって真青な黒味がかった海中深くすいまれるように沈んで行く。

手元の道糸が指先からどんどんと相当の早さで出て行く。水深95mであるけれど潮に流され120m位い糸が出てしばらくしてやっと止った海底に錘が到着した。直ぐ糸のたるみ(糸ふけ)をとってこませかごを海底から3m上げ糸をしっかり持って腕を上下に大きく2-3回振りこませを撒き直ぐ1m上げて魚信を待つ。

全神経を右の人差指に集中させる。目を閉じるとシーンと頭が静まり指先だけに神経が集まる。

指先にはたゞ重い錘りと大きく揺れる船の動きが道糸に強くなったり弱くなったりして伝わってくる。

糸が120mも出ると延びの少ない硬質の糸でも少々の感触は糸に吸収され分からないものだ。

一番始めの魚信を逃すと魚がかゝったか、そうでないか見逃してしまうことがある。魚がついていて、そのまゝ次のこませを撒いたりすると外れてしまうことがある。

少し間をあけて2度、3度と繰り返し魚信を待つ

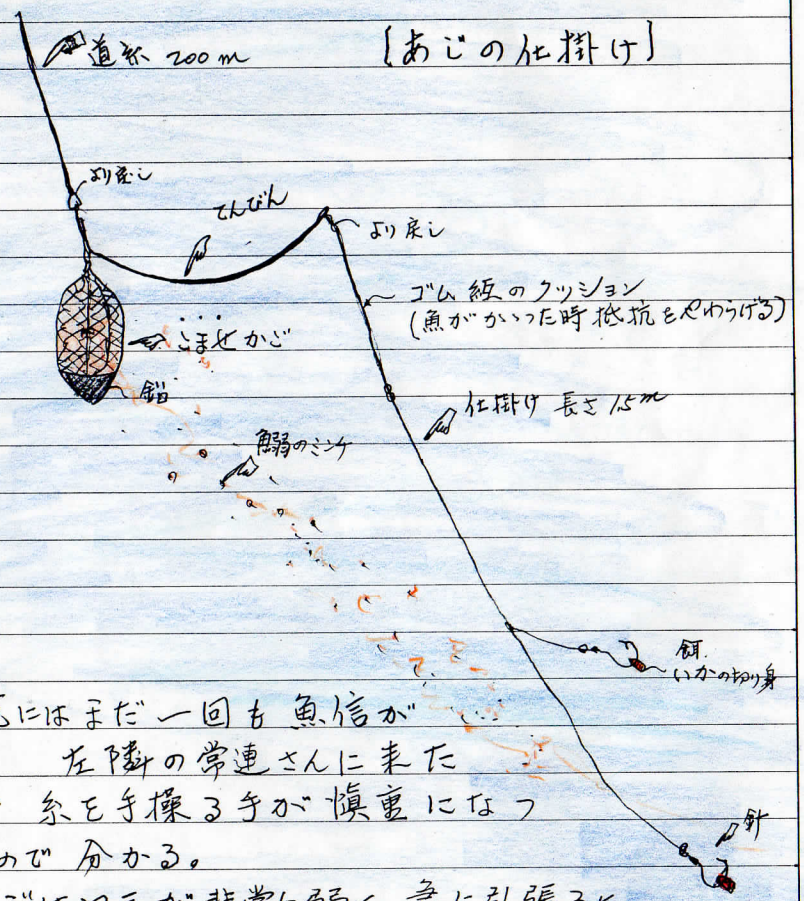
魚信がなければ素早く道糸を手操りこませを詰め替える。

深い海底から糸を手操ってくるので両腕と糸を握る指がきつい。

両隣の人にもまだ魚信が無いのか空振りで急いで道糸を手操り再び仕掛けを沈めている。

早く誰かに来ないかなー!!と思っている頃、釣り始めて10分位いたった頃 船長が出たよ!!とマイクで知らせて皆んなを励ます声を耳にした。

静かにやっていたが急に元気が出て誰もが次は自分もと思うのか、次々にこませを替えて振る手や竿がせわしくなった。



俺にはまだ一回も魚信がない。左隣の常連さんに来たようだ糸を手操る手が慎重になっているので分かる。

『アジは口元が非常に弱く急に引張ると針のかゝっているところの口が切れて外れてしまう。』

特に最初の一匹目は慎重になるものだ。250m前後のいい形だ。大事に玉網でとり込んで俺の方をちらッと見てバケツに入れた。

隣に来て俺に来ないとはどうして!! 何んで!!
船内のあちこちで魚を取り込むにぎやかな声を耳にする。船長の出たよと云うアナウンスはしなくなった もうその必要はない。

俺の心にあせりが出て来た。まてまてやがて来るだろうと さらに一生懸命に糸を振り魚を誘う。

『餌を撒いて魚を寄せて釣る方法だから魚の泳いでいる場所(棚と云う)に丁度来る位置にこませを撒き、こませの煙幕の中に仕掛の針を入れないと何時までたっても魚は釣れない』

時間がどんどん経過するがまだ魚信がない。隣の若者はもう3匹目を上げた。どうして俺には来ないのか心配になる。心はあせるばかりだ。

色々と棚を変え どの棚でアジが喰うか捜す。棚さえ掴めば釣れる確率が高い。

『魚の棚については、魚が生息している場所で海中の深さで海底から何mとか海面から何mとかで云われている。

真アジは年中通して底から1m～5m位いのところに群れ、プランクトンや小えび小魚を餌にしている。

アジの腹の中には大きな魚は入っていないとてもきれいで胃袋が小さい。腹をさいて料理するので分かる。

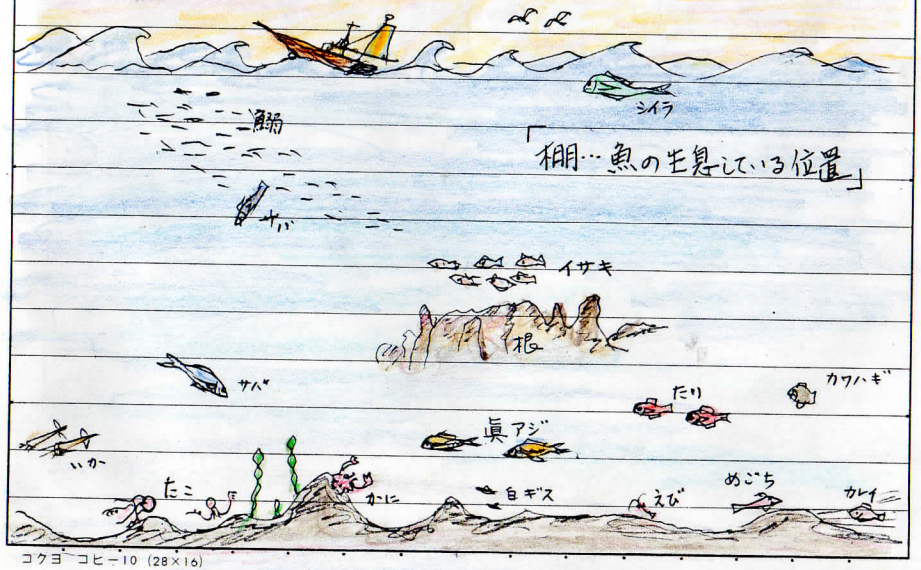
サバはアジより3m以上から海面近くまで棚の巾がとても広い。鯛は底から1m～10m。イサキは根から2～10m 白ギスは底から1m カレイ・ヒラメ・メゴチ・たこ・スミイカ・はぜは海底にと棚が違う。

しかし場所や水温・潮の流れやそれから季節により棚は変る。その日船長が魚群深知器で見ながら絶ずアナウンスしてくれる。

アジは特に棚の巾が少ないのでその日の潮の状況によって変るので棚をさぐるのが面白くもありむつかしいもんだ。

喰いの悪い時は目の前に餌が来ても口を使わないもんだ 魚も腹がいつも減っていないからなあ。

潮の動かない時は魚も動かないのか潮止りの時間は喰いが悪い。そんな時でもベテランの船長や釣名人と云われる人は餌を上手に動かして魚の食欲を出させて、うまく誘い、釣ることもある。



その日最初に釣った人に棚を聞いてその通りにやると本当によく釣れ出すことが多い。しかし本当のことを教える人は少ない。自分が竿頭になりたい欲と競争心を釣人は大なり小なり持っているからなあ!!

俺も人に負けることが嫌いな方でベテランやマナーの悪いやつには本当のことは云わない。」

やっと俺の指先に最初の魚信が来たグッウと糸を引くようなかすかな感触が指先に伝わる。かなり強烈な手ごたえである。これでやっと一匹目をものにすることが出来る。顔がカーッと熱くなってくる。

口が切れないよう針から外れないよう糸をゆるめないよう、しかもゆっくり慎重に少しづつ重い糸をたぐる魚が付いているとその分だけ重い。

120mも延びた糸をたぐるので骨が折れるが魚がついていると思うと腕の疲労は半減する。

60m位い上げても魚の動きが大きい、時々逆に突き上げてきて軽くなる、アジとは違う引きだ頭の中にサバのイメージが浮かんだ。やっと海面に姿を見せて大きく左右に強烈に引張る。

大サバ(35cm)だ隣の人達に糸がからまないよう素早くごぼう抜きで船内に引き上げた。

あゝ残念、一はつ目がサバでがっくりだ。

少し棚が上だったのかと反省しながらこませを詰め替え再び海中に仕掛けを落す。今度は50cm位い下げ低い棚をさぐってみる。2回〜3回とこませを振り1m上げては魚信を待つ。

竿頭……一番数量を多く釣った人。

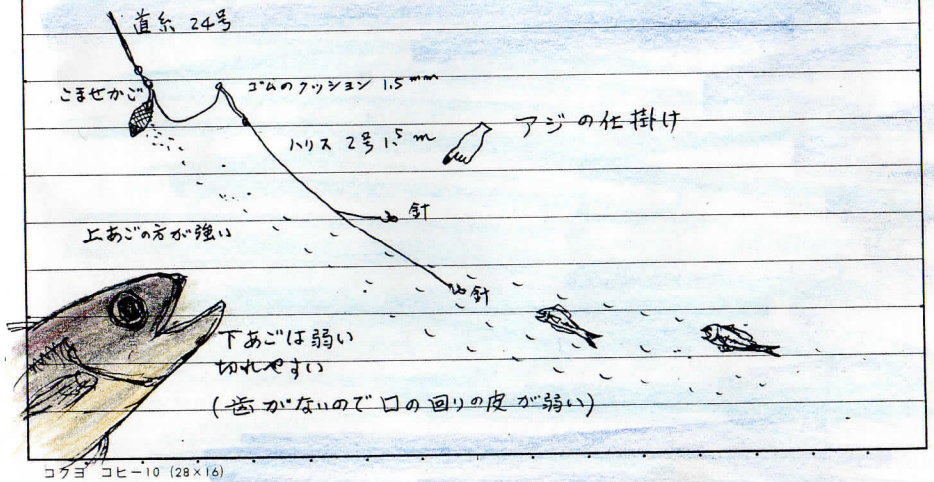
期待で胸が大きくふくらむ、この魚信を待つ時が好きだ、今か今かとその瞬間を待つ。

俺は気が短かい方で余り長く待てない方だ。だから魚信が無いと再び次の動作を繰返す。

人差し指にグウッと重く魚信が来た、船が波で大きく上下する感触とほんの少し異なる違ったものを一瞬感じた、腕を少し上げると魚の抵抗がわずかに伝わってくる。しめたと思う心と外れるなと思う心が同時に湧いてくる。今度こそ本物だサバではないはっきりとアジの引きだ。

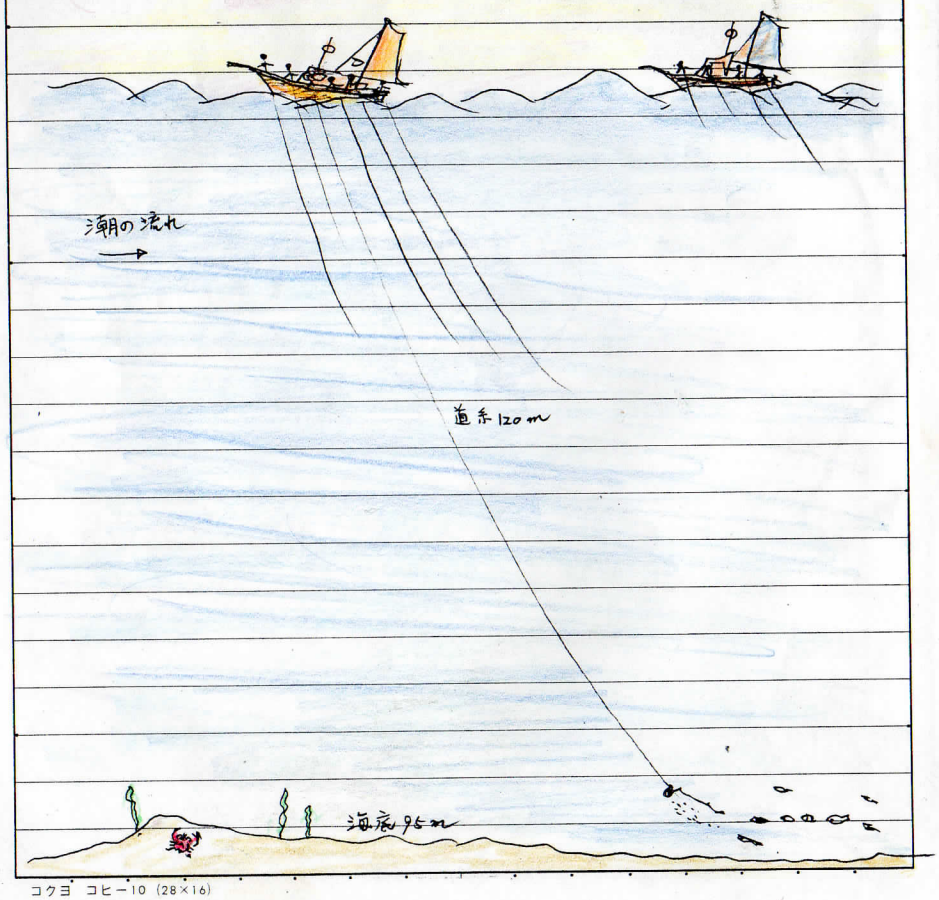
口が切れないよう道糸をなめらかに慎重に手繰ってくる。時々糸を持つ指の間からズルーッと道糸が延べる。

この時魚と人が長い糸でむすばれ力の強い方へ引張られる。心地良い手ごたえが伝わってくる。少しでも雑な動作で糸を手繰ぐると針から外ずれ離れていってしまう。



2度、3度と魚の抵抗を感じながら深い海中から少しづつ上げてくる。早くアジの顔を見たい。真青な海中を身をのり出して覗く、胸の高鳴りを覚える。ひたすら糸をたぐる　アジの顔を見ても手元に取込むまでは油断は出来ない。もう直ぐ見えるかと心を引き締める。

だゝ一人で味あうこの心地、風の寒さも腕のきしみも忘れる一時である。平和で幸を感じる一瞬である。



魚信があった海底からだいたい3分の2位い上げたところで左隣の常連客に俺の糸がからまったようだ。魚があばれるのと潮の流れで糸が俺の方に斜めに流されるのでからんだのだ。

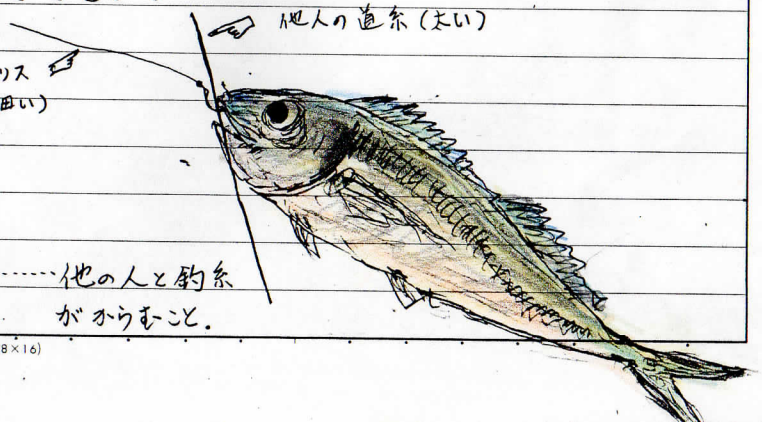
一瞬やばいと思いゆっくりと魚が口から外れないよう心で祈りながら糸を手繰る。

隣の客はまだ気がつかないのか容赦なく自分の糸をたぐっている。俺の道糸をたぐる重さが急に軽くなった。

「もっとゆっくりやって!!」と隣に声をかけたが遅かった。

『※魚が付いていない時は次の仕掛けを手早く入れないと数が延ばせないので、他人と糸がからまっていない時は素早く糸を手繰るのが常識である。しかし他の人とおまつりした時はお互に声をかけ合って釣れた魚が外れないようにするのが釣人のマナーである。糸がからむと鯵はたいがい口から針が外れ逃してしまう。』

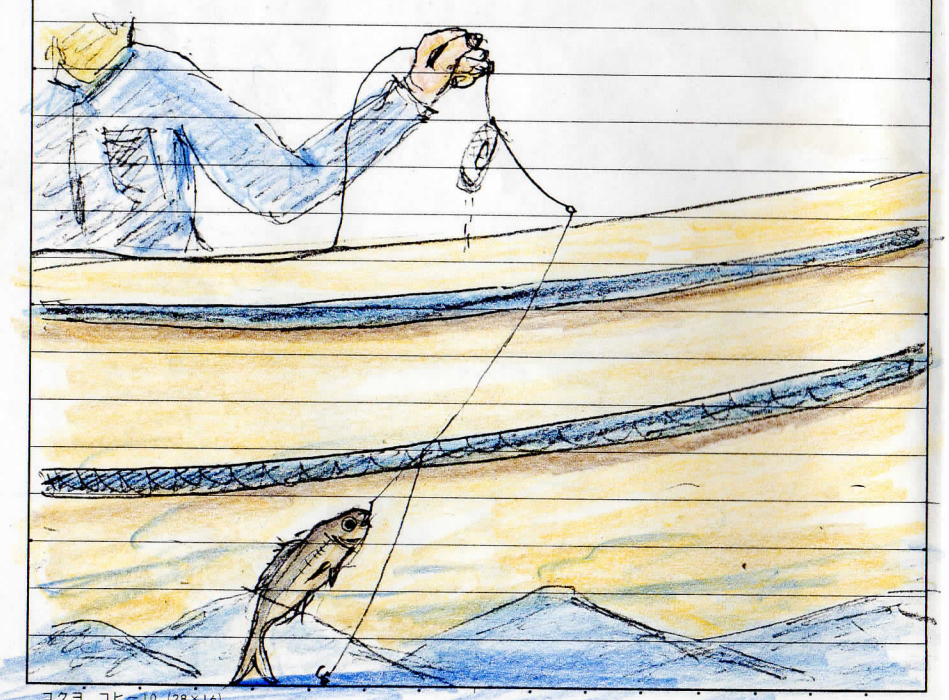
やっと一匹来たのに惜しいことをした残念で悔しいもうちょっとかげんしてやってくれないかと憎んでももう戻ってこない。



※おまつり……他の人と釣糸がからむこと。

こま世がきいてきたのか 船内のあちこちで ぽつぽつ出てきた。 俺にも又魚信がきた、アジ特有の心地良い手ごたえだ。今度は隣とからまないよう右側に離れて糸をたぐる。深い海底からやっと無事に舟べりに上げた。まるまるとよく太った中広の中アジだ 25～6cmあろうか、朝日に魚体が輝いてとても美しい。目が俺の方を見て動いている。立派なアジだ、よくも釣れて来てくれたとアジに感謝したい気持ちだ。

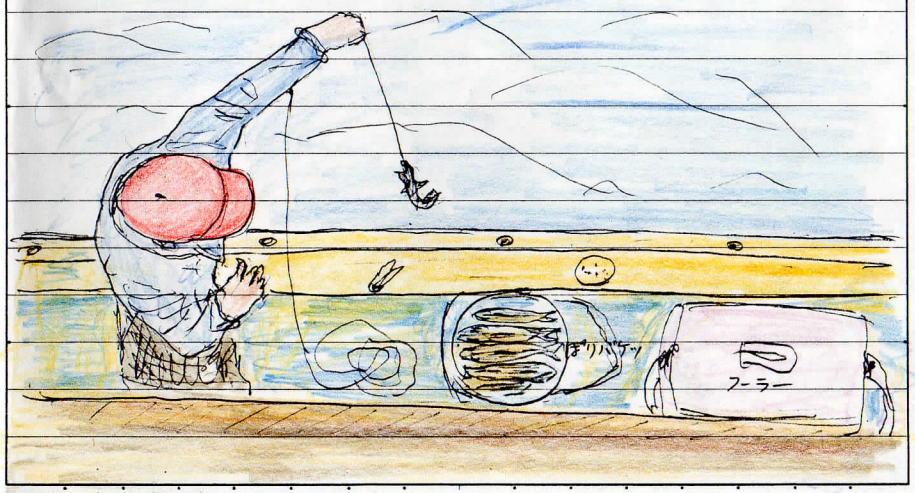
多くのアジの仲間と離れてかわいそうに思う、人と魚のこの世の運命だ、許してくれ心の底で思う。 俺がアジだったら餌をよく見ないで針にひっかかって シマッタ!!と思っていることだろう。



潮がきいてきたのか仕掛けを投じてこま世を振ると直ぐアタリがきた。何度繰返しても同じような手ごたえではあるがこの感触がたまらない。だから釣りは止められない。 ポリバケツの中には二匹、三匹、四匹と溜っていく。生き生きした黒い目が鮮明でとてもきれいだ。

バケツに10匹溜まると氷と海水を入れたクーラーに入れて鮮度を保つ。今日の総数はクーラーに何回入れかで分かる。(10匹×6回+2匹)=62匹となる。サバや鰯やその他の魚は本命でないので外道として数に入れない。

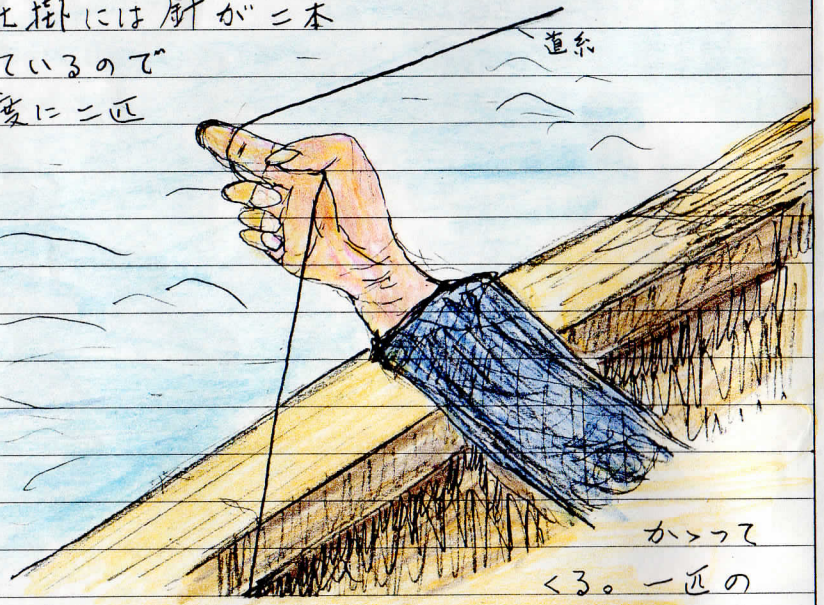
魚の喰いが立って(盛んに餌を追いあさるている)いる時間に数を延さないと多くは釣れない。一中日のんびりやっていては少ないチャンスを逃がしてしまう。一ぷくすることも、食事をすることも小便もがまんして釣れている時は釣りまくる。群が船の下に長時間いる時は少ない、又一日中喰いが立っていることも少ない。



魚がよく喰っている時は誰でも釣れるもんだ。しかし数を延ばすには何如に手返を素早くするか、糸が手元でからんだりしないよう。あばれる魚の口から素早く針を外しこませを詰め替え一刻も早く次の動作に入らないとだめだ。

そのためには手元をきれいに片付け動作が重復したり複雑にならないよう手順をきめ無駄な動きはしないようにする。それから道糸は出来るだけ細くして水の抵抗を少なくし錘も重いものを使って何秒間でも早く海底に到着するように気を使わないとだめだ。

仕掛には針が二本ついているので一度に二匹



かゝってくる。一匹の魚信で直ぐ上げないで二匹目の魚信を待つ、余り時間を置くと一匹をばらす(逃す)ので上げるタイミングがむつかしい。余り欲をかくと一匹も釣れない、空振りで120mもの道糸を手操るので腕の疲労が倍増する。

魚が余り釣れていない時はなるべく身体を休めてエネルギーを浪費しないようにして、次に魚の群が来て喰い出すまでエネルギーを保つよう心がける。

そうは云ってもぽつぽつと釣れている間は全く休むことも出来ない。絶ずこませを撒いて魚を集めなければならない。全員協力してやらないと魚はどこかえ散ってしまう。

体力を保存しながらしかも手際よく魚をとり込む。続けて一、二匹上げているうちにその日の魚信をからだで自然と覚えてくるもんだ。

いかに早い時間にその日の棚と魚信ぐあいを知るかで勝負が決まる。

『一日中分からないまゝ時間を潰して帰る時間になってしまうこともある。』

やがてやっと調子が出て来た、隣の二人にも追いついた。釣人は他人の釣果が気になるもんだ横目で見ているとだいたい分かる。それに鰺は一度に何匹も上がらいので計算出来る。俺は人から釣果を聞かれるとたいがい少な目に云うことにしている。わけがわかるだろ。

時間の経過とともにだんだ数の差が出るしまう頂には何倍も差がつく。マラソンと同じだ。

6匹目の魚信で道糸を手繰り始めていると少し間をあけて左隣の常連客も道糸を手繰り始めた。又糸がからまないかと慎重にたぐる。海面を見るとアジが隣の仕掛けにからんでいるのでゆっくり船べりに上げようとしていたら隣の人は大急ぎで糸をたぐりアジを

自分の方に取込んで小声でおれのだよ!!とこちらも何かないて急いでハサミでハリスを切ってバケツに入れた。

のんびりしているようだがその時の早かったこと早かったこと俺は余りの早さに口が開けず ちょっと仕掛けを見て!!と云いそびれてしまった。一瞬の出来ごとで俺は自分が釣ったのではなかったかと錯覚してしまった。

その人がどんな顔をしているか見たがこちらを見ないまゝ仕掛けを直し始めた。俺も船長から一組購入して新しい仕掛けに取り替える。その時間がもったいない 5~6分はかゝる。

『糸が他人とからんで同時に魚を上げた時は自分のものかどうかは魚信と手繰ぐる時に分かるもんだ。初心者にはわかりにくいけど ベテランになるとたいがい分る。それでもハッキリしないときはお互の糸を伝ってゆけば必ず分かる。誰でも自分のものにしたい欲はあるが一言相手の了解のもとに魚を取り込むのが釣人とマナーである』

たかが鰯一匹で隣人と争うようなことは好まないその人が喜こんでいるならそれでいゝ。しかしそんなことが二度、三度とあると余り気分はよくないもんだ。

出来るだけその人の糸とからまないよう反対側に向けて釣るようにする。それでも潮の流れでからむと又やられてしまう。でもその人は嬉しそうに魚を掴んで自分のバケツに入れている。

俺よりも2ツ位い老けて見えるし釣の動作も違いし数も上っていないようなので我慢してそのまゝ続けた。

こん度からはその人より離れて席を取ることにしよう。

二時間ぐらいやると棚と魚信を完全につかめた。アジ特有のグウッーと短かく突くような魚信を楽しむ。この調子で釣れ続くのかと心配するくらいだ。潮の変らいうちにと船長がどんどん釣って!!と皆を励げます。

潮が少し変って少し落ちて来たが、俺には依然として魚信がが続く、こうなると心に少し余裕が出る。他の人の様子を見たり附近の釣舟を見ながら次から次えとアジを取込み素早く針を外す 他の人が俺の方を見ている。口には出せない いゝ気分だ満足感とそして優越感で自然と顔がゆるむ。

先程のあのあせりも惜しさも全て過去のものになってしまった。

『乗合いの釣り舟には必ず常連客で釣名人が来っている。そう云われている人よりも俺の方が一匹でも多い時程嬉しいことはない。誰でもそうと思う。』

今日の鰯は形が揃っているので60匹位で24ℓのクーラーが一ぱいになった。最初に釣ったサバは海に捨て少しでも本命のアジだけを入れる。

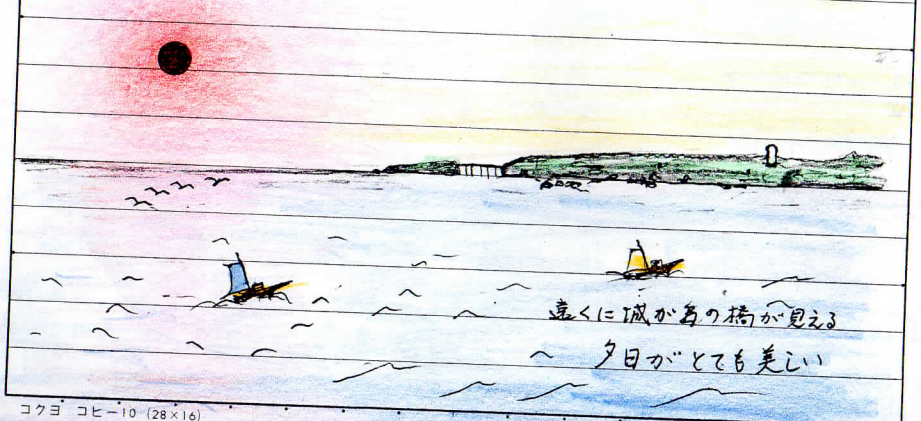
他の船はどうだったのか気になる明日の新聞を見れば分かる。今日のポイントは実によかった船長さんよく釣らしてくれたと感謝する。客の満足感が伝わり船長もあゝ今日は良い日だったと云う顔になっている。

真赤な大きな太陽が城が島の西の空に沈んで行く。白波をけたてゝ船はスピード上げ帰路につく。

昼間あれ程荒れていた海が沖から遠ざかるにつれて少しづつやわらいでくる。

多く釣った人もそうでない人もくたくたに疲れた身体をキャビンに横たえ しばらくの間今日の釣果や棚や仕掛け それから潮の具合 魚信方等について 話し合う。自慢するもの反省するもの 黙っている者。聞いていると面白い 俺も仲間に入るが 腹が減っているのでパンをくわえる。狭いキャビの中はたばこの煙で一ぱいだ。俺はたばこを止めてもう10年位になる 今はたばこの煙が大嫌になった。止めて下さいと云えない八幡橋に帰るまで1時間半我慢する。むかしは魚が釣れた後は必ず1本口にくわえたもんだ。釣れない時もよくふかした。釣れた時は実にうまかった。

グループで来た若い女性は沖に着いて少しの時間やって居たが 舟酔いで顔の赤味がすっかりさめて気毒なほど青白い顔でぐったり横になっている。出船前はとても元気にはしゃいでで居たのに、男と余り変らない服装で準備をして居た。目元のきれいな色白の女で今回で3度目だと云っていた。



せっかく楽しんで釣に来たのに舟酔しては苦しいばかりだ。舟酔いしたからと云って船から直ぐ降りるわけにはいかない、1時間半以上かゝって城が島沖まで走って来たのだ本人はよく分っている。他の人に迷惑にならないよう口から吐いて跡始末をきれいにしなければならない。

『人は楽しい時は時のたつのを忘れるが苦しい時は非常に長く感じるものである。舟酔で苦しい時は早く戻る時間(3時ごろ)にならないか時計ばかり見るもんだ 他の人達が楽しそうに沢山釣っていても 何んの欲も起きない。少しでも気分がよくなる姿勢に身体を休める、やはり床に横になって何かに掴っているのが一番よい。
舟の振れで座席から転り落ちないようしっかり物を掴んでなるべく動かないようにする。船底を波がたゝく音が大きい。そんな時は胃の中が熱くなり胸が自然と絞り出すような苦しさがくるもんだ自然と涙が出る咽の奥から黄色い水とつばが一緒に湧いてくる、何度も何度もその繰り返しを重ねる。
時計を見てもまだ帰る時間まで相当ある。
全部吐いてしまうと出るものが少なくなるが胃の絞りが強くなるもんだ。
しかし少し風がなぐとたちまち揺れが少なくなり気持が楽になるもんだ。』

『船上では他の人達が楽しそうに大声でヤフー大きぞとか一荷(二匹)で来たとか云ってはしゃいでいる。』

グループの若い男が女に具合いを聞いてやっている、女は少しも動かず横になったまゝだ、寒さで眠ることも出来ないのだ　男は雨合羽を女の足にかけてやった。

俺はたまにこういゆう光景を見る。その人の苦しさがよく分かる。

実は俺も乗り物には弱い方で新婚旅行で広島から大阪までプロペラ飛行機に乗った時酔ってしまい、楽しいはずの新婚旅行も苦しくて花嫁にいやな目で見られた、バスや電車にさえ身体の調子が悪い時は少し乗くなるくらい弱い。そこで釣の好きな俺は磯釣の方が多かったが釣り場は埋立により無くなり又汚染され魚が減って釣れなくなった。八丈島や三宅島迄まで行けばまだまともな魚が釣れるが飛行機に弱いし一日の休みではだめだ。手近な船釣りに行くようになった。

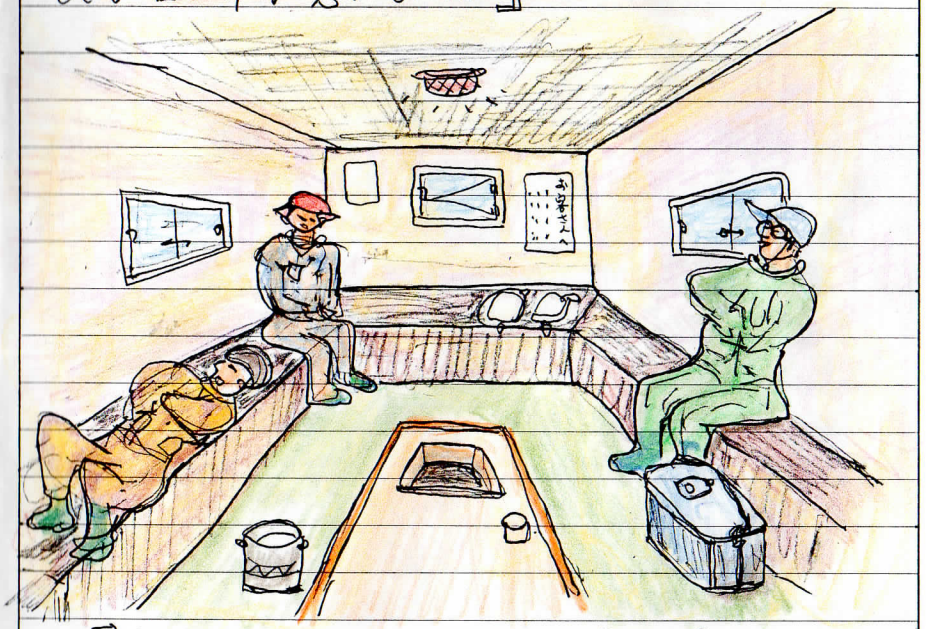
乗酔対策として

①…前日、睡眠不足で船に乗らないこと。俺は何時ものように晩酌でいゝ気持になって九時までに寝床につく。しかしだ明日は釣行となると嬉しさで小供の頃のようにわくわくした気分で天候のこと釣道具のこと釣り方など色のことが頭の中にぐるぐる廻って直ぐには眠れないもんだ。昼間に肉体労働や歩いたりして運動疲れをするよう前日は気を付ける。汗を流すとよく眠れるもんだ。

②…乗船する30分前に薬を必ず飲む、船酔止め薬の中には眠り薬が入っているのでキャビンの奥でぐつすり眠込んで船が釣場え着いた頃目をさます。実に気分良い出足となる。

③…目は一番揺れの少ない船の中央に座席をとる。そしてなるべく遠くの景色を見る近くの波のうねりや手元は見ないようにする。

酔が軽い時は早く胃の中のものを吐いて口をお茶ですゝぎ顔を乾いたたぼるできれに拭きさっぱりして釣座に深く座り釣に没頭する、吐そうになればそのまゝ海に出す。そのうち魚が上がれば一瞬酔を忘れてくるもんだ。しかし一度吐いた後は帰宅しても口の中が悪いもんだ』



『釣をやったことのない人でも魚を喰べている俺の彼女はとても料理がうまいので釣った鯵をさしみにしたり、たゝきにしたり又塩焼きしたり空あげでうまいうまいと言ってやってくれるのでありがたい。

大量に大きな網で補獲して箱積めにしたものと違い肉質が痛んでおらず生きているうちに氷の海水

に直ぐ入れて冷し そのまゝ我家まで持ち帰るので荷ずれや肉ずれが全くない。

我家は彼女と娘二人の四人家族で皆魚が好きで 魚屋から買って来てうまい料理を喰させてくれる。 ありがたいことだ。

一度大漁があると当分魚に不自由しない 生きのいゝうち 2日間迄では生でいける 3日目からは酢の物。焼き物。てんぷら。つみれ。ハンバーグ ムニエル。 からあげ。煮物。吸物と多種楽しめる。

魚にあいたら アジを三枚におろし骨を抜き身だけを、細切りしたねぎと、生姜をおろした汁を すり鉢に入れよく練ると、ねばりが出る。 それを平べったく丸るめて 油を引いた古いフライパンにかけ ちょろ火で焼く 蓋はすき間のないやつで 2〜3分 焼くと実にこうばしい肉質がしまって歯ごたえもいゝ、軽い感じで なんぼでも口に入る。 この喰べ方が魚を大量に使うのでよい。小さい小供には一番良い骨無しだから。

冷凍庫に年月日を入れサランラップで 2〜3重つづラップして置くと便利である 仕事が忙がしく何箇月も釣行き出来なくても不自由しない。

『こんなことを書いているうちに メゴチの天ぷらを思い出したので ご紹介しよう。

俺が最も好きなのはメゴチの天ぷらである白ギスよりうまい。 なぜ白ギスと比べるかと思うだろ それは 白ギスを釣りに行くとメゴチも釣れる

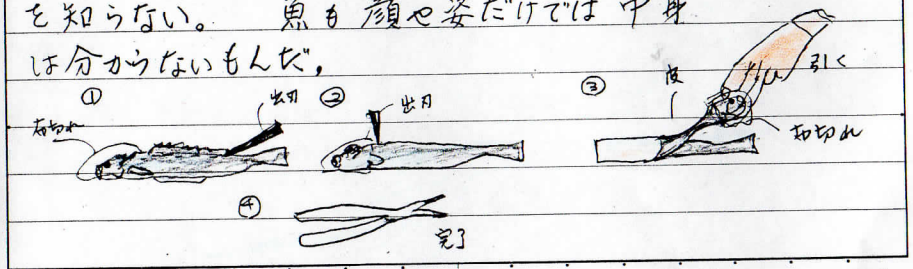
からである。 白ギスは海底から1m位までが棚であるが メゴチは海底が棚であるため 針を海底に着けて置くとメゴチが釣れる。

顔は白ギスの方が美人だが メゴチちゃんは全く美のかけらもない しかも全身ぬらぬらの粘液で覆われている。たこやうなぎのぬるぬるよりもひどい。素手でつかむことはむつかしい。きざきざの刃のついた火箸でつかんで針をはず。

料理のやり方を以前船宿の奥さんから習った。俺は木綿の布切れを 10cm角位に切ったものでめごちの頭にかぶせ 指でつまんで まな板に押し付けるようにして固定し出刃を使う。 まず背びれを剥ぐようにして切り落す。 次に表の首から出刃を入れて裏らの皮を切り落さないよう注意して残す。次に頭をつかんでそのまゝ尾の方にゆっくり引張ると きれいにねばねばぬるぬるの皮が剥れる。

一皮剥けば はっとするような色白の少しピンクがかった肉体が現われる。身がくりとしまり丁度ミスコンテストに出場する美しいもゝのようだ。次に三枚に卸す尾は残す。

メゴチの天ぷらは身がほどよくかたく身くずれしない歯ごたえで 脂肪が少なくこれほどうまい魚の天ぷらを知らない。 魚も顔や姿だけでは中身は分からないもんだ。



次回の釣行きのことや本日の反省やら思いめぐらせているうちに昼間の疲れがどっうと出て眠けがさす。

船長はひたすら猛スピード(40km/h)で剣崎沖を過ぎ浦賀水道を抜け観音崎の灯台を左手に見ながら夕やみの冷たい海上を走り抜ける。赤い太陽が昼間の強い輝きを無くし弱々しい光を放って三浦半島の低い山の影に没していった。赤い夕空が澄んでいる。

エンジンの心地よい響きを感じて横になっていると睡魔におそめてそのまゝ船のスピードが落ちるまで眠ってしまう。

船が船宿の前に接岸すると皆んな重いクーラー軽いクーラーそれに道具を両手に持ち古びた木の桟橋を渡り上陸する。船酔の女もやゝ元気な足どりで同じように下船した。

にこにことている人　くたびれてしょげている人　戻って来る人の顔と目の玉を見ると今日どうだったか分かる。

俺は一言今日は良かったよ　ありがとう!!と大声で云った。船長はにこっと喜こんでいた。

家路に急ぐ我家だけではとてもさばきゝれないので知人の家に無理やり置いて行く。もらった人は料理が大変だろうと思う。　魚の好きな人は喜こんでくれて嬉しいもんだ。　持って行く家はいつも同じになるもんだ。

釣った魚はウロコを剥し腹を出し頭をはねてきれいに水洗いする。アジは簡単である。(キス、メゴチは大変である)

俺は釣り行ったその日は余りほしくない　他のものが欲しいもんだ。

食卓に着いても体がまだ揺れている。一ぱい目の冷いビールが咽を通って行くのが分かる程うまい。

一日中船に揺られ足、腰をふんばって無中で腕を振り魚信をとって手繰り上げる労働で全身程良い疲れで日頃の仕事のストレスが全て発散されて気分が良い。

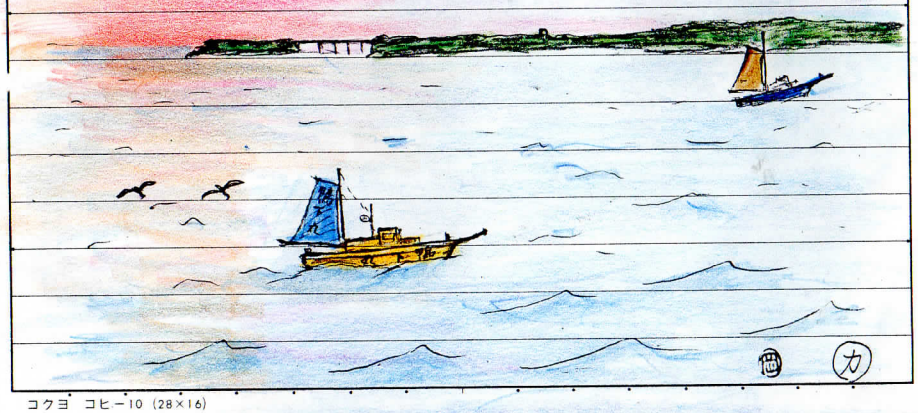
仕事よりきついが自分の好きなことなので疲れは全く残らない。少し腕がいたいぐらいだ。

風呂に入るとじーんと指の先から身体のすみずみまで心地良い。

寝床にばたんと倒れるようにして入る。5分もしないうちに深い深い眠に入る。人差指が魚信を待つ形で目がさめた。8時間も一回も目をさまさず気持よく熟睡した。

1993. 12. 8

終り



夕日は海に沈む。淡が出た。

小1の夏 溜池で鮒を釣る。
お母さんが笑顔で釣った魚を見て下さった。

1938年夏 6才。 里庄村ハッスの溜池にて
(1932年5月8日生れ)

コクヨ コピー10 (28×16)

おかつとむ